



田倉牛神社（備前市）

～ 衛 生 情 報 ～

- 今年も定期報告をお願いします！
～オンライン申請による定期報告も可能になります～
- 伝染性ファブリキウス嚢病が県内で発生しています！
- ヤギの中毒にご注意！
～ヤギはなんでも食べると思っていませんか？～
- 家さん農場のハエ対策～冬季にもハエは存在するのか～

～ そ の 他 ～

- おかやま黒豚の繁殖管理について
- つやま和牛の肉質向上を目指して



岡山県マスコット
「ももち」

<連絡先電話番号>

農林水産部畜産課 : 086-226-7431

岡山家畜保健衛生所 : 086-724-3880

井笠家畜保健衛生所 : 0866-84-8221

高梁家畜保健衛生所 : 0866-22-2077

津山家畜保健衛生所 : 0868-29-0040

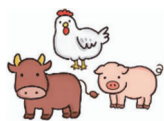
農林水産総合センター 畜産研究所 : 0867-27-3321

原稿を
掲載しています

《発行》岡山県農林水産部畜産課

<https://www.pref.okayama.jp/page/detail-26074.html>





今年も定期報告をお願いします！

～オンライン申請による定期報告も可能になります～



定期報告とは、飼養衛生管理基準を定められた家畜の所有者が、毎年、飼養目的（愛玩用、観賞用、学術用、展示用等）に関わらず、飼養頭羽数や衛生管理の状況等を県知事に報告するものです。これは、家畜伝染病予防法により義務づけられていますので、家畜の所有者は期日までに報告をお願いします。

対象家畜

牛、水牛、馬、鹿、めん羊、山羊、豚（ミニブタ等含む）、いのしし、鶏、あひる（アイガモ等含む）、うずら、きじ、だちょう（エミュー等含む）、ほろほろ鳥、七面鳥

報告内容（令和7年2月1日現在）

飼養規模※により、報告内容が異なります。

- ① 家畜の所有者及び飼養衛生管理者の氏名、住所、連絡先、農場の所在地
- ② 家畜の種類と頭羽数
- ③ 畜舎等の数
- ④ 農場の平面図
- ⑤ 飼養衛生管理基準を遵守するための措置の実施状況に関する報告
（立入禁止看板や踏込消毒槽・車両消毒器の設置、埋却地の確保状況、飼養衛生管理マニュアルの写し、遵守状況の自己点検表 等）
- ⑥ 担当獣医師名、特定症状確認時の通報規定

※飼養規模の区分

小規模飼養者・・・①②のみ報告

- 牛、水牛、馬：1頭 ●鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし：6頭未満
- 鶏、あひる、うずら、きじ、ほろほろ鳥、七面鳥：100羽未満
- だちょう（エミュー等含む）：10羽未満

大規模飼養者・・・①～⑥全て報告

- 成牛：200頭以上 ●豚：3,000頭以上 ●鶏：10万羽以上 等

上記以外の規模・・・①～⑤を報告

報告方法

これまでの紙による家畜保健衛生所への報告に加え、今年度から、農林水産省共通申請サービス（eMAFF）を利用した報告も可能になります。

農林水産省共通申請サービス(eMAFF)とは

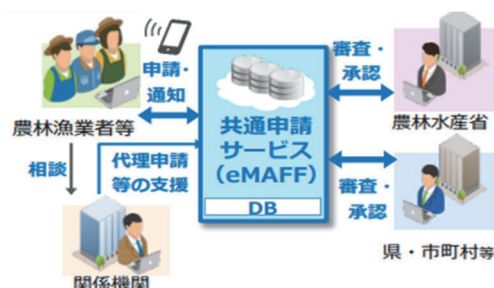
各種申請をオンラインで行うためのシステムです。令和6年10月から順次、畜産関係の報告ができるようになりました。

○令和6年度以降の電子申請が可能な手続き

- ・令和6年10月～ 家きんの自己点検（家きんの所有者）
- ・令和7年2月～ **定期報告**（全家畜の所有者）
- ・令和7年5月～ 豚等の自己点検（豚等の所有者）

電子申請を行うには
**eMAFF IDの取得及び
家保による審査**が必要
となります。

右のQRコードから
手続きが可能です。



○eMAFF に関するお問い合わせ先

- ・Web フォーム：<https://e.maff.go.jp/Inquiry>
- ・TEL：0570-550-410（ナビダイヤル）

平日9時30分～17時30分（土日祝日・年末年始を除く）



最後に

定期報告に併せて、飼養衛生管理基準に沿った**飼養者**として守らなければならない**事項の再確認**をお願いします。なお、飼養衛生管理基準や各提出様式は、農林水産省の下記のホームページでご確認いただけます。

（https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku_yobo/k_shiyou/）



（井笠家畜保健衛生所）

伝染性ファブリキウス嚢病が 県内で発生しています！

伝染性ファブリキウス嚢病（以下 IBD）は、IBD ウイルスの感染による鶏の急性ウイルス性疾病で、届出伝染病に指定されており、“ガンボロ病”とも呼ばれています。今年度、県内の複数の肉用鶏農場で IBD が確認されており、注意が必要です。

本病は IBD 発症鶏の糞便に含まれたウイルスを経口摂取することで感染が起こり、リンパ系組織が阻害され、免疫抑制を引き起こします。それにより、ワクチンの効果が減弱したり、他の疾病が増加したりすることで経済的損失が大きくなります。

臨床症状

2～10 週齢の若齢鶏での発生が多く、元気消失、白色水様性下痢などの症状が見られます。

本病は、ウイルスの病原性と性状により、「従来型」、「強毒型」及び「抗原変異型」に大別されます。

表 1 ウイルス型別の比較

	従来型	強毒型	抗原変異型
致死率	0～5%以内	50%以上	0～5%以内
病 状	軽い下痢と元気消失後に回復 症状を示さない場合もあり	下痢症状、脱水の急速な悪化	強い免疫抑制により他の疾病を誘発
発生状況	全国にまん延	1990 年の流行以降発生なし	近年増加傾向



写真1 IBD 発症ブロイラー（40 日齢）：元気消失

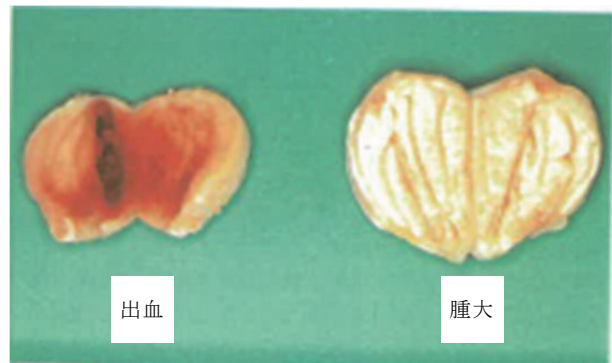


写真2 ファブリキウス嚢の病変（出典：鳥の病気 鶏病研究会）

発生状況

毎年、地域を問わず全国各地で発生が見られています（図1）。岡山県は今年4件確認されており、2015年以来9年ぶりの発生となりました。

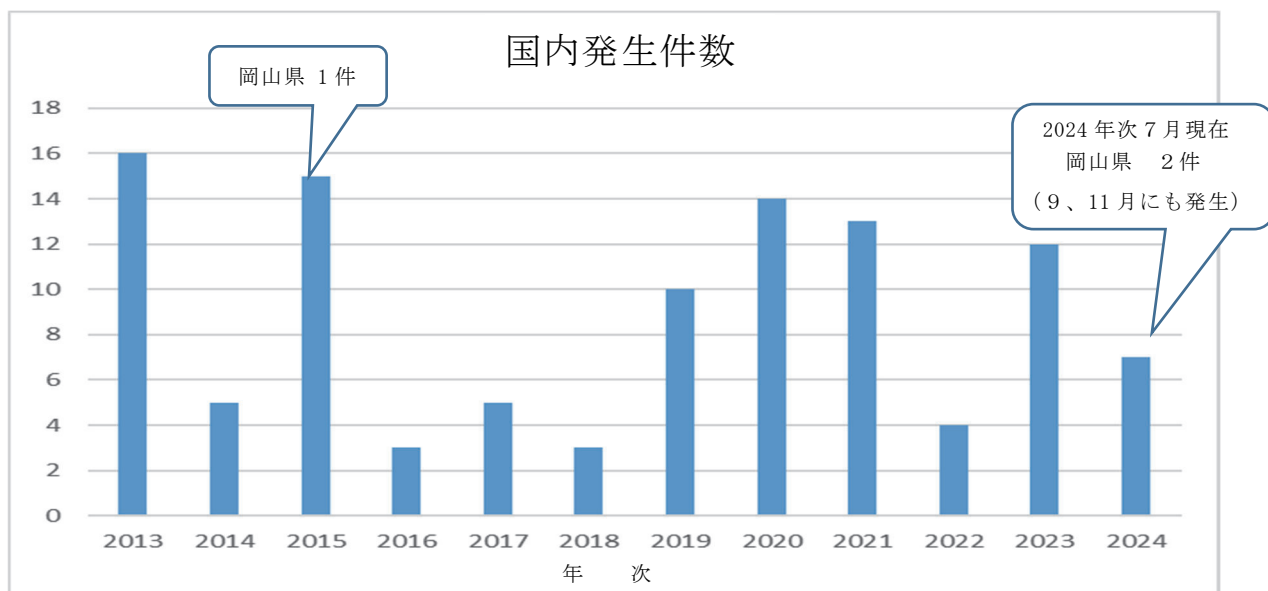


図1 IBD 国内発生件数の推移（農林水産省 監視伝染病の発生状況より引用）

対 策

1 消毒の徹底

IBD ウイルスは高温や消毒に抵抗性が強く、一度発生した農場ではウイルスが長期間残る傾向があるので、オールイン・オールアウトと鶏舎の洗浄消毒を徹底することが重要です。

2 ワクチンの適切な接種

IBD ワクチンは、移行抗体が高い場合はワクチン効果が得られない（ワクチンがテイクしない）場合があります。鶏群の移行抗体のレベルを把握し、ワクチンを複数回投与してワクチン抗体が上昇していることを確認し予防に努めましょう。

おわりに

近年国内で発生している従来型株や抗原変異型株による IBD は、致死率はさほど高くない場合が多いですが、免疫抑制を引き起こすため大腸菌症など他の疾病の発生が増加し、経済的損失が生じます。強毒型株は、国内でしばらく発生がありませんが、海外では流行がみられているため無視できない状況です。

抗体検査などの希望がありましたら、最寄りの家畜保健衛生所へご相談ください。
（高梁家畜保健衛生所）



ヤギの中毒にご注意！！

～ヤギはなんでも食べると思いませんか？～

最初に

ヤギは愛らしく、ペットとして人気があります。また、休耕田や畦の野草を食べて草刈・除草してくれるので、重宝されています。

ヤギを飼われている方から「ヤギはどんな植物でも食べてくれるから助かるよ」と、聞くこともあります。確かに、ヤギは他と比べて様々な植物を食べますが、実はエサに気を付けなければならない動物であることを皆さんはご存知でしょうか。

今回は、ヤギのエサについて注意して欲しいことを紹介します。

中毒症状

エサに有毒な植物が含まれていた場合や、少量なら問題がないものでも食べた量によっては中毒を起こし、重篤な場合は死んでしまうこともあります。食べたものによって様々な中毒症状が現れます。代表的な症状は、嘔吐、下痢、よだれ、運動障害、呼吸困難、けいれん等です。

エサについて注意すること

ヤギはエサが豊富な時期であれば、本能的に有毒植物は避けるので、中毒についてそこまで心配することはありません。

ではどのような時に注意しなければならないのでしょうか？

① 人がエサを与える時

人に懐いたヤギは、人が与えるエサに有毒な植物が含まれていたとしても食べてしまうことがあります。

エサに有毒なものが含まれていないか確認して与えましょう。

② エサが乏しい時（冬期等）

空腹に耐えかねて有毒な植物も食べてしまいます。エサが乏しい場合は、購入乾草などを適宜与えましょう。

③ 有毒植物の近くにロープなどで係留している時

ヤギは好奇心旺盛なので、有毒な植物であっても口に入れてしまうことがあります。ヤギが届く所に有毒植物が生えていないか確認

しましょう。

主な有毒植物



①野草：シダ、ワラビ、シロツメクサ等

②庭木：ツツジ、キョウチクトウ



アジサイ、スイセン等

※常緑の園芸樹木は有毒なものが多いので、剪定した枝葉等はエサとして与えないください。

③作物：トマト（青いトマト、葉や茎）



ジャガイモ（青くなったジャガイモ、葉や茎）

葉野菜（ほうれん草、キャベツ、ハクサイ、レタス等）

※葉野菜は少量であれば問題ありませんが、多量に給与すると硝酸塩中毒を起こしてしまうこともあります。実際に、ハクサイやキャベツのみをエサとして与えられたヤギが、葉野菜に含まれる硝酸塩を多量に体内に蓄積したことで、硝酸塩中毒を起こし、死亡したという事例がありました。



（写真）ツツジ
係留されているヤギの近くにあると、興味を持って食べてしまうこともある

最後に

ヤギの健康を守るためには、適切なエサを与えることが重要です。

【例】：成雄ヤギの場合…濃厚飼料：0.3～0.6 kg / 日

乾牧草：1.5～2.0 kg / 日

牧草：2.0～6.0 kg / 日



※(独)家畜改良センター ヤギの飼養管理マニュアルより抜粋

野草や野菜等をエサとして与える場合は、その中に中毒を引き起こす有毒な植物が混入していないか、また、同じものを一度に大量に与えていないか等、十分な注意が必要です。

日頃から中毒の予防と早期発見を心がけ、異常が見られた際は迅速な対応を行うためにも、かかりつけの獣医師にご相談ください。

（岡山家畜保健衛生所）

家きん農場のハエ対策 ～冬季にもハエは存在するのか～

HPA I 発生の原因のひとつはハエ??

家きん飼養者の皆さん、通年でハエ対策をしていますか？春から秋にかけてはしっかり対策されていると思いますが、さて、冬季はどうでしょうか？

今、ハエが鳥インフルエンザウイルスを媒介する可能性が再注目されています。九州大学の調査によると、令和4年に鹿児島県出水市で捕獲したオオクロバエから、高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPA I）ウイルスが検出され、渡り鳥の飛来地周辺では捕獲した個体のうち 14.7%が保有していました（表1）。

オオクロバエは、主に冬季に活動する大型のハエで、市街地や農地など至る所に分布していますが、野鳥の死骸に集まるなど、腐肉食性があり、家きん舎の臭いに引き寄せられると言われています。そのため、冬季に HPA I ウイルスを持ったオオクロバエが家きん舎内に侵入した場合、これを家きんが食べる等によりウイルスに感染し、HPA I 発生に繋がる可能性があると考えられています。

しかし、実際のところ冬季の家きん舎内でハエを見かけることがあるのでしょうか。今回、県内の家きん農場に御協力いただき、ハエ対策の状況も含めてアンケート調査を行いましたので概要を紹介します。

ハエ対策アンケート調査

ハエ対策アンケート調査は、令和6年6～8月にかけて、県内の養鶏農場を対象に行い、101農場（採卵72農場、肉用29農場）から回答がありました。内訳は、飼養羽数別で見ると5～10万羽クラスが28農場で最も多く、鶏舎の種類別では開放53農場、ウインドレス42農場、混在が6農場でした。

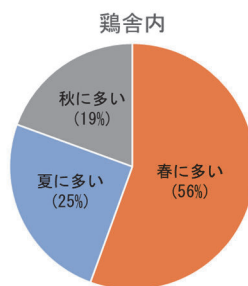
なお、以降で紹介するアンケートへの回答は、いずれも複数回答可としています。

1 鶏舎でハエの多い時期は？

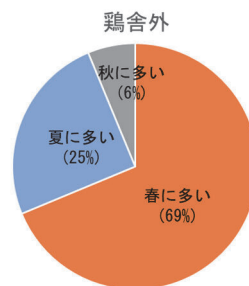
鶏舎内、外とも春が多く、次いで夏に多いという回答で、冬にハエが多いと回答し

表1 鹿児島県出水市におけるオオクロバエからのHPA Iウイルス検出率（出典：九州大学 藤田らの調査より）

時期	捕獲数	検出数	検出率	備考
令和4(2022)年 12月	651	14	2.2%	ツル渡来地周辺 14.7%
令和5(2023)年 12月	252	1	0.4%	



回答数延べ36件



回答数延べ48件

図1 ハエの多い時期

た農場はありませんでした（図1）。

なお、年中少ないと回答した農場は約4割の43農場でした。

2 ハエ対策の状況と内容

（1）実施状況

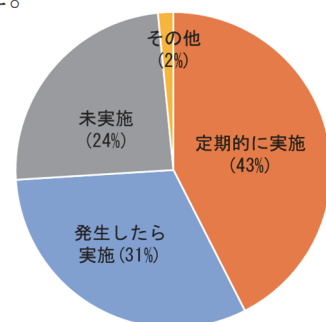
ハエ対策の有無については、「定期的に実施」又は「発生したら実施」との回答が合わせて94件で全体の74%でした（図2）。

また、ハエの発生が年中少ないと回答した農場でも、何らかのハエ対策を実施していると回答したところは18農場ありました。

（2）対策内容

実施している対策については、ハエ取りシート等による物理的な駆除が最も多く、次いで殺虫剤等散布、その次に薬剤等による誘因駆除という結果でした（図3）。

冬季のハエ対策は45農場が実施していましたが、主な内容は前述と同様、ハエ取りシート等、誘引駆除、殺虫剤散布でした。



回答数延べ127件

図2 ハエ対策実施状況

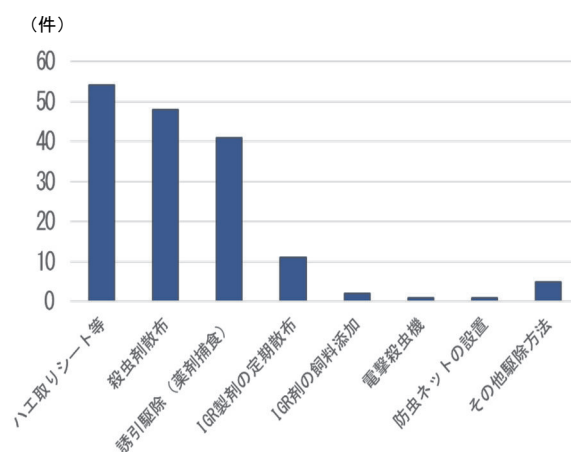


図3 ハエ対策の方法

冬季でもハエ対策を！

アンケート調査から、冬季はハエがいないと認識している農場が多いようですが、九州大学の調査からもわかるとおり、ウイルスを運ぶリスクのあるオオクロバエは冬でも発生します。また、本県の調査でも、12月頃までは、オオクロバエと思われるハエが農場周辺で確認されています。

オオクロバエは腐肉食性ですので、対策として、死亡家きんや農場周辺の野生動物の死体などを放置せず、見つけ次第適切に処理することが重要です。HPAI 発生のリスクになり得るものをひとつでも減らすために、ハエ対策は季節を問わず実施することをおすすめします。

今シーズンは、令和4年度に匹敵するペースでHPAI発生が続いています。家きん飼養者の皆様は気の抜けない毎日が続いていることと思いますが、引き続き、ウイルスの侵入防止対策や消毒の徹底をお願いします。

（農林水産部畜産課）



おかやま黒豚の繁殖管理について

畜産研究所では、1973年に鹿児島県からの導入豚を元に、その他の国内先進県や原産国のイギリスから導入した優良豚を交配して改良した純粋バークシャー種である「おかやま黒豚」を生産してきました。

今回、当所の直近の繁殖成績をまとめたので、その概要について紹介します。少しでも管理の参考になればと思います。

繁殖成績

表 1 年度別子豚生産成績

項目 \ 年度	R元	R2	R3	R4	R5
年間分娩腹数(腹/年)	69	74	77	82	56
母豚一腹当たり平均総産子数(頭/腹)*	8.74	8.69	8.94	9.33	9.55
母豚一腹当たり平均生存産子数(頭/腹)	7.48	7.92	7.74	8.50	8.77
母豚一腹当たり平均離乳頭数(頭/腹)	6.81	7.14	7.45	8.10	8.25

*死産は含まない

令和元～5年度までの子豚生産成績を表1に示しましたが、令和4、5年度の一腹当たりの産子数は増加し、繁殖成績が改善しました。繁殖形質に基づく豚群の改良の結果とも考えられますが、令和3年度から取り組んだ飼養衛生管理改善もその要因と考えられたので、管理面での取り組みを紹介します。

令和3年度以降の取り組み

1 人工授精への切り替え

交配方法を自然交配から人工授精主体に移行し、令和4年度以降は殆ど人工授精にしました。当所で作成した液状精液を、スパイラルカテーテル（未経産豚）又は深部注入カテーテル（経産豚）を用いて発情確認した雌に半日毎

に3回注入しています。人工授精は自然交配に比べ、衛生的に操作ができ、注入精液の活力を確認できる利点があります。その結果、令和4年度以降、受胎率は95%を超えました（図1）。

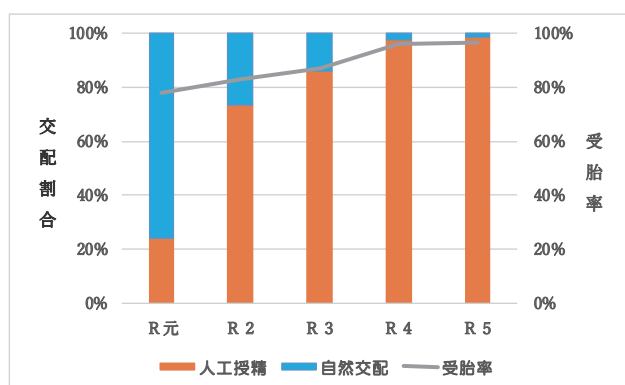


図1 交配方法の割合と受胎率

2 母豚のボディコンディションスコア（BCS）改善

以前まで、BCSにより母豚の給与量を個別に調整していましたが、結果的に過肥が増加し受胎成績が安定しませんでした。令和3年度から母豚の給与量を原則一定量とした結果、豚群のBCSが低く抑えられ、成績が改善したと思われます。

3 洗浄・消毒の強化

表2 死産率及び子豚の事故率

項目 \ 年度	R元	R2	R3	R4	R5
死産率(%)	14.43	8.86	13.37	8.89	8.22
哺育事故率(%)	8.91	9.90	5.03	4.73	5.70
離乳後事故率(%)	3.83	2.08	1.41	0.60	0.65

表2のとおり、令和4年度以降、死産率は10%未満、哺育事故率は6%未満、離乳後事故率は1%未満となり、改善が見られました。死産や子豚事故が減少した要因として豚房の洗浄・消毒の強化が考えられます。以前の事故原因は、主にすず病、ダンス病及び神経症状を伴う急死等感染症が主体でしたが、当時は母豚の腹冷え防止や子豚の保温を重要視して、汚れが目立つ箇所のみ洗浄・消毒を実施していました。それを、豚房全体の汚れが見えなくなるまで洗浄・消毒するように変更した結果、感染症が減少しました。



図2 洗浄後の分娩豚房



図3 洗浄後の繁殖豚房

以上の3つが成績改善の要因と考えられます。

おわりに

5年間の繁殖成績から、高能力豚や最新機器の導入がなくとも、衛生管理や飼養管理の徹底により生産性を改善できる余地があると考えられました。生産者の皆様も、基本的な管理を再度、見直してみてもはいかがでしょうか。

（畜産研究所）

つやま和牛の肉質向上を目指して

津山地域では平成 26 年度から地域ブランド「つやま和牛」の肥育牛生産を行っています。出荷頭数は年々増加し、昨年度は 63 頭のつやま和牛を出荷しています。つやま和牛生産者部会では、肉質向上を目指して、肥育牛の血中ビタミン A（以下、VA）コントロールによる脂肪交雑の改善に取り組んでおり、定期的に血中濃度を測定しています。家畜保健衛生所は VA 測定と結果のフィードバックを通して飼養管理技術の向上を支援しています。

VA 測定の取り組みについて

VA 制限開始時期（13～15 ヶ月齢）と終了時期（18～20 ヶ月齢）の 2 回測定を実施しています。結果は個体ごとに図 1 のように表にまとめ、各月齢における VA 目標値と比較します。血中濃度が高い場合には飼料の給与内容の見直し等を行い、低い場合には適正な VA 補給について指導しています。

別紙検体一覧ビタミンA検査									
採血 順番	個体番号	雌雄	生年月日	採取日	月齢	調査項目	検査結果 (IU/dl)	計画値	22ヵ月齢 計画値
1		♀	R5.6.7	R6.9.2	14.9	ビタミンA	55	70	50
2		♀	R5.6.5	R6.9.2	15.0	ビタミンA	34	70	50

低い
 やや低い

コメント
 今回、いずれの牛についても計画値よりもビタミンAの濃度が低い結果となりました。
 このままビタミンA制限を行うと、ビタミンA欠乏症になり、肝機能障害を引き起こしたり、「ズル」と呼ばれる筋肉に水腫が引き起こされる場合があるため、ビタミンAの補給治療をお勧めします。

図 1 VA 測定結果の報告書例

BMS No.の推移と今後に向けて

出荷開始からのつやま和牛の BMS No. の平均値は右図のとおりです。VA コントロールの開始当初は No. 7 程度でしたがここ 3 年間では No. 9 程度まで上昇しており、BMS No. の向上が認められます。

つやま和牛生産者部会では、ブランド力向上への熱意がますます高まっており、関係者一丸となって更なる増頭と枝肉成績の向上に向けて取り組んでいます。

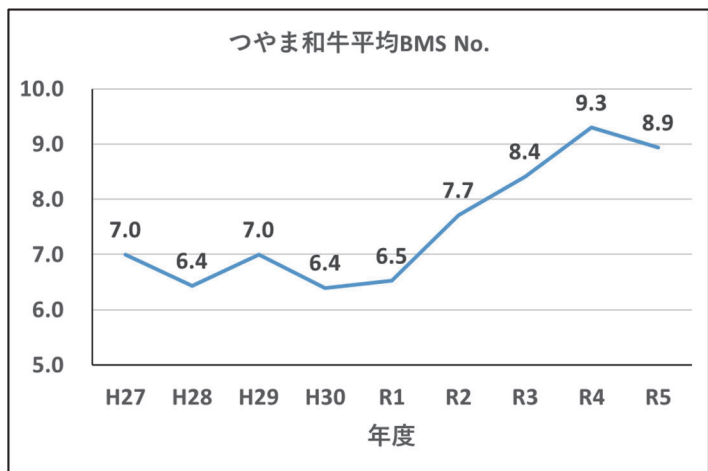


図 2 つやま和牛平均 BMS No.の推移

（津山家畜保健衛生所）